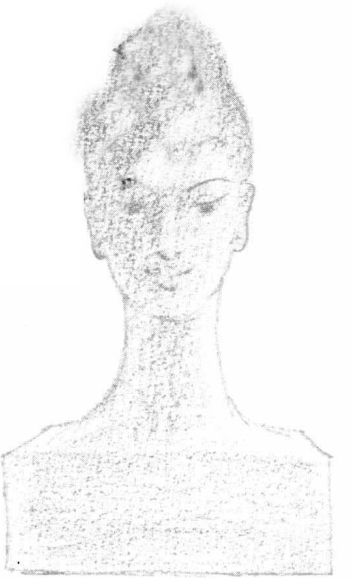
悔いなき煩悩

下巻

丹羽文雄



新潮社版

悔いなき煩悩 下

昭和三十八年十月二十六日　印刷
昭和三十八年十月三十日　発行

定価　三四〇円

著者　丹羽文雄

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京（260）一一一一

印刷・塚田印刷株式会社
製本・神田加藤製本所

© F. Niwa 1963　Printed in Japan.
（乱丁・落丁本はお取替えいたします）

長編小説

悔いなき煩悩（下巻）

目次

予　言……七
モデル……二一
生理変化……四三
煩しいこと……五九
矛　盾……八三
大胆なイメージ……九〇
愁いの日……一一四
居候と玄関……一二七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

アトリエ開き……一五一
魅　力……一七一
夢の手前……一七九
身のまわり……一九二
白銀灯……二〇五
秋　風……二三一
三　猿……二三六
ある日……二四八

装幀　都竹伸政

悔いなき煩悩（下巻）

予　言

丸ビルの風早みどりを勤先に訪ねていくと、先客があり、
「ちょっと待ってね」
と、風早みどりが手をあげ、駒子にいった。そこの面会所は、むき出しになっていた。商売用の客らしく、風早みどりの話し方はてきぱきとしていた。客は四十すぎの男だったが、圧倒されて、おとなしく聞いているだけである。風早みどりをながめていると、いつもそう感じるのだが、全身これ闘志といった、勇ましくて、すがすがしいものを感じさせる。女らしさが稀薄で、それだけ男の領分にふみこんでいる、その移動をすがすがしく感じるのかも知れなかった。早く良人に死別し、ずうっと独身をとおしているが、妻としての家庭的な幸福を切りすててしまってからは、性を超越した人間になった。負惜しみでなく、風早みどりには、そうした生き方がいかにも身についているようであった。
客がかえった。客の立ち上った椅子に、駒子を招いた。
「来るだろうと思ってたよ」
「もっと早くお礼やら、おわびに上ろうと思ってたんですけど」
いつもの喫茶店ではないので、受付の女などにも、駒子は神経を使わねばならなかった。風早みどりは、忙しいのであろう。喫茶店に誘い出さないところをみると、時間をうちあわせてある客があるのかも知れなかった。
「おわびは、よかったね」
「びっくりなさったでしょう」
「たしかにびっくりしたね。いいえ、ね、ただの落花狼藉なら、珍しくも何ともないんだけど、あの宴会には、もうひとつ、結婚披露という厳粛の意味があった。あつまった客が、きれいにそのことを忘却していたことに、おどろいたんだよ」
「申訳ありません」
「何も駒子があやまることはないよ。私は、お前さんが可哀そうになった。これからも、しょっ中あんな扱いをうけるのかと思うと、お祝いをいう気もなくなってしまったよ」
「画家の生活って、あんなものかと思いますわ」
「いや、ちがうだろう。そりゃ修業時代には、鬱積したものがあって、それがときどき爆発をする。らんちき騒ぎも

おこすだろうが、そんなことは学生時代で、一応すんでいることだよ。いつでもくりかえせるというものではないよ。お前さんを前にしていうのは、気の毒だけど、よほどしっかりしていないと、お前さんはおいてきぼりをくらうよ。絵描きは、よい絵が描ければよろしい、私生活なんか、どうだってよいという破滅型の思想が、やっぱり権威をもっているようだからね。ほんとうは、そうではないのだが」

「秀れた画家は、人間的にも秀れた人ですわね」

駒子は、対照的に宇津木直晴を思い描いた。それは、はっとするような思いようだった。何かが駒子の胸にとびこんできたようである。

「しかし、一概にそうともいえないね。一流の絵描きさんの中にも、いやな奴がいるからね。人間的に零という奴もいるよ」

「秀れた芸術家は、秀れたものを作っていく内に、ひとりでに人間的にもみがかれていくのではないでしょうか」

「それは、理想論だよ。いやな奴の根性は、死ぬまで持っていくからね。そりゃ、苦しい時代とちがって、カムフラジュされる。衣食足りて礼節を知る、というふうには人間も変るだろうが、中身まで変るわけではない」

「伊賀を、どうお感じになりました？」

風早みどりは、駒子の眼をじっとみた。駒子は、こわくなった。このひとが、お世辞をいう人間でないことをよく知っているからである。いったん口を出たことばは、訂正ができないのだ。風早みどりは、あの夜の印象をとくにふりかえるというふうでもなかった。伊賀信に対する評価は、すでに出来上っている。が、それを駒子の顔にたたきつけることがよいか、どうかを、案じているようであった。

「私には、伊賀という人間がよくわかりません。というのは、第三者の目で見るわけにいかないのですわ」

「そうだろう。あばたも、えくぼというからね。正直なところ、多分に危険をはらんだ人間だ。自分がこれからどう動いていくか、本人にもわかっていないだろう。自分の仕事に対しては、がんこで、純粋で、つよい信念をもっているらしいが、私のいうのは、人間的ということだ。伊賀信は、自分の人間ということについては、無知だね。そんなことは、ちっとも考えていないね。画のことだけが頭にある。それ以外は、考えるのもじゃまになるといったふうだ。危険をはらむと感じたのは、そういう男の生活態度だよ。早い話が、お金がどしどしはいるようになれば、生活は一変するよ。そういうタイプの人間だと、私は観察したね」

かねてからの駒子の不安を、風早みどりが指摘した。や

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

はり駒子には、衝撃だった。自分のとり越し苦労であると否定することがこれでなくなったわけになる。駒子は、風早みどりの指摘する危険を冷静に感じていた。伊賀はスタートについただけで、まだ走り出してはいないのである。両手の位置、足の据え方、固め方に、駒子は心をくばった。伊賀はすなおであった。駒子は伊賀という人間を、よく知っていると思った。しかし、それは、あくまで走り出すまでの伊賀であった。走り出してしまえば、どうなるか。伊賀と肩を並べて駒子が走っていくわけにはいかないのである。走り出せば、伊賀は自分の力だけで走るのだ。右にそれようと、自分のペースを忘れようと、それは伊賀自身の仕業となる。駒子は、ついていけないのだ。

「お前さんは、常之君の場合とおなじで、何となく姉さんぶってみたいところがある。それが、お前さんを不幸にする原因だよ」

バスの中で、駒子は風早みどりにいわれたことを反芻していた。思いがけない批評というのではなかった。駒子の顔をみると、風早みどりはきまってそういうのである。駒子自身も、おのれの性格に関しては、百も承知である。バスは駒子を、今日の予定どおりの行動をとらせていた。心の中にどのような懊悩があろうと、行動は、心誓証券の優秀な外交員らしくふるまわせるのである。心の中のために行動がにぶるということがなかった。チーズ笑いが、身についているように、心の上にふたをして、何気なくふるまうことが習性となっていた。

——不幸な女だ、私のような性格は……

しかし、そのために一家の責任者としての義務は果せるのである。女は男によってつくられるということがある。女としての仕合わせは、女ひとりの力だけでは足りないものである。男の協力によって、それまでの女とはちがった女となることであった。自分のような性格では、それが不可能なようであった。明らかに男の領分にふみこんでいる。駒子は、常之に対するように伊賀に対していた。おなじようにふるまおうと意識してのことではなかった。ひとりでにそういうことになってしまうのだ。伊賀が四つ年上であることには、何の権威もなかった。それだけの値打ちもなかった。むしろ常之よりも、年下の値打ちしかなかった。そんな異性を迎えるので、ますます駒子のもって生まれた性格がのさばり出すのかも知れなかった。

——しかし……?

と、駒子は顔をあげた。街のようすで、目的地に近いことがわかった。遠木夫人を訪ねる約束になっていた。常之や伊賀に対するときの自分が、自分のすべてというわけ

ではないのである。ちがった自分を見出すこともできるのだ。

——宇津木直晴に対するときの私は、人間がちがっている。しかし、たしかにあれも私の正体にちがいない。

対象によって自分がちがった女としてふるまうのだ。そのどちらも、真実であった。これは、いったいどうしたことだろうか。宇津木の前に出ると、自分は、いかにも女らしくなってしまうのだ。伊賀の場合には、女であることだけでは安心がしていられなくなってしまうのだ。ひとまかせには出来ないのである。おせっかいやきであり、苦労性な自分だと思う。が、宇津木の前にいると、そうしたものが嘘のように消えていた。宇津木に対しては、そうしたことが何の意味もないからであった。

「金がはいるようになってごらん、あの男は自分の好きなようなことをはじめるだろう。自分でもうけた金の魅力はまた格別だからね。だれにも気がねなしに、使うことが出来るのだ。すると、これまでのお前さんとあの男の位置が転倒するのだ。今までのように生活の面倒をみてやっているつもりでいると、どんでんがえしをくらうよ」

風早みどりのことばは、駒子を強迫する。

「生活力のない男を、生活力のある女が世話をしていた。その一家は、それでバランスが保たれていた。だんだんと男の方に生活力がついてきた。男と女の立場が、逆になった。男は強くなった。そうなったとき、お前さんは、平凡な、生活力のない妻の位置にかえることができるかね。男の生活力にすがりついて生きていく女の真似ができるかね。これまでの調子とは、一変するのだ。たとえば、あの老母にしても、今までは世話になっているという遠慮から、何もいわなかったが、息子が強くなれば、勢いにのって、お前さんに対して、かれこれいうようになるだろう。のんきもので、気のいい老母というふれこみだったが、私はそうは観察しなかったね。なるほど、息子に対しては、気のいい母親だろう。しかし第三者に対しては、どうかね。お前さんとは他人なんだからね。あの老母は、ずけずけともものをいうようになるよ。そうなったとき、お前さんは、どうするね。世間の気の弱い細君のように、かげでぶつぶついってるだけで、面と向っては何もいえないという女になれるかね。昔の恩をわすれたのかと、お前さんは、たえず腹の中でうらみに思うことだろう。すると、それが顔色に出るというものだ。伊賀信も、そんな女房の面をみているのは面白くないだろう。以前のバランスは、こわされてしまう。しかし、それでもなおお前さんが伊賀という男が好きなら、話は別だよ。好きということは、不思議な作用を

もっているものだからね。第三者にはがまんのできないことも、がまんをさせるものだ。姑にいじめられても、亭主に抱いてもらえば、いっぺんに悲しみは消滅するという魔術のようなものだからね。しかし、お前さんがはたして、そんな女になれるだろうか」

駒子にとってやりきれなかったのは、風早みどりのいうことが、ひとつのこらず、自分の胸に浮ぶことばであることだった。

「伊賀信が、よくよく気にいらなかったようですわね」

「いや、私は無遠慮に、思ったことをいってるだけだ。いい男だよ、いかにも駒子が好きになりそうなタイプだ。似合いの夫婦だよ。私もいろんな男をみてきているからね、お前さんにとってあの男は、ちょっと信用ができないなという気がするのだ。それでもかまわない、好きなんだからというのなら、それでもかまわないさ。お前さんの亭主なんだからね」

「これまでの自分のやり方を押しとおしていっては、衝突があるだけだということはわかってますわ」

「お前さんは利口だから、みんなよくわかってるのだ」

駒子はそのとき、自分に必要なのは、女らしくあることだと思った。その意味でも、宇津木直晴は自分に必要だった。宇津木の前にすわっているような自分を、伊賀の前にもってくることである。

それは、虫のよい考え方だった。そんなことが、はたして可能か、と疑うよりも、駒子は努力したいと思った。自分がえらんだ伊賀信である。そのことに、そうかんたんに絶望を宣するわけにはいかないのだ。しかも、まだ厄介な事情にはなっていないのだ。

――私にも、いたらない点はある。

伊賀のやり方に、いちいち反撥を感じているだけが、妥当とも思えなかった。伊賀のような人間には、女はきわめて謙虚にふるまわねばならないようである。いったん有名となり、金のはいるような画家になれば、当然駒子のふるまいは謙譲にならねばならないのだ。それは、敗北を意味しなかった。伊賀の性格をうけ入れ、それに添うように生き方を変えることであった。ちょうど宇津木直晴に対するように、駒子自身が無力であることを意識し、自分にのこされたものは、ただ女であるということだけに徹すれば、うまくいくはずであった。そうした女になることが、平凡であり、古風な生き方にしても、そのことがふたりの愛情を保ち、そだてていくに大切な土壌であるなら、駒子はもって瞑すべきであった。

遠木夫人と会い、用をすませると、夜になった。

バスの中で、久我山を訪ねようか、どうしようかと迷った。が、結局このまま目宅にかえることにした。わが家にもどる、商店のすくない道を歩きながら、この道を常之と往復したことを、ふと思い出した。何のつぎほもなく思い出した。

——そのころの私と、今の私と、いったいどこがちがっているだろうか。

ちがっているあきらかな証拠はなかった。肉体の上に、ふたりの異性がしるしをつけた。そのことは、生理的にも大した出来事ではなかったようである。嘘のような気もする。デリケートな肉体の感受性の手前、大きな相違が生じていてもよいはずだった。それが、まるでないのだ。川の面のようであった。石を投げこめば、川面は一時乱れる。感情的な飛沫をあげるが、それが消えると、何事もなかったように川は流れる。駒子の肉体の上にも、それとおなじことがいえるようであった。駒子は何となく、自分がふてぶてしくなったような気がする。ふてぶてしいのはいやだった。が、何とも致し方がない。

そこにわが家をながめるところまで来ると、

——伊賀はいないのだ。

と、思った。妙に空虚が感じられた。常之の場合は、あてがあり、駒子はわが家にかえることに張合いがあった。こういう毎日の、小さい失望感がつもれば、どうなるのか。お由が別居生活の不自然をいったのは、こわい真実を衝いていた。

——今日の私は、何となく伊賀に逢いたくなかった。風早みどりにいわれたせいもある。しかし、こう自分の感情のままに会ったり、会わなかったりすることは、どうだろうか。

自分の家は、ここしかないという生活と、気が向かなければ、何日でも良人の顔をみないですごせるという別居生活とは、夫婦の心情の上にデリケートな、重大な相違をもたらすようであった。夫婦というものは、いつもよい面だけで向きあっているものではないのだ。顔をみるのもいやだ、口をきくのもはらがたつという対立感情も、一つの壜の中に封じこめられたような生活では、対立感情そのものにやりきれなくなって、いつとはなしに夫婦は妥協の手をのばして しまうもののようである。筋の とおらない妥協も、夫婦であればこそ可能であった。しかし、それには、あくまでひとつ屋根の下にいるという条件がつく。

駒子が伊賀と、夫婦としての仕合わせを持ちたいならば、ときには老母に厭味をいわれることも必要だったかも知れない。いやなことは、つとめて避けて、よい面だけで

夫婦関係を維持していきたいとのぞむのは、虫がよすぎるようであった。自分に生活力があることは、いやなことを避けていられるが、反面何かを犠牲にしていることになる。

駒子は、わが家の電話口に立った。

「信ちゃん、ゆうべから帰って来ないんですよ」

と、老母が答えた。

「どこへいったんですか」

「多分お友達のところだろうと思ってますが」

特選祝いから、伊賀の生活は再び昔のようになっていた。気軽に、友達をたずねることが出来るようになった。卒業後へんに世間をせまくしていたのは、芸術家らしい孤高の精神からでなく、何となくすねていたと解されても仕方がない。

——妻が良人の行動を知らずに、のんきにかまえている。それが私だ。これでは伊賀が、妻という実感が持てないにしても、文句はいえないだろう。

平凡な、お由のことばが、駒子を脅かすのだった。

翌日、街から駒子は久我山に電話をかけた。

「まだ帰って来てません。いったいどこへいったんでしょうね。糸のきれた凧みたいですよ」

そういいながら、老母はいっこう心配しているふうもなかった。学生時代には、そんなことがしばしばあったのだろう。

つぎの日、駒子はまた電話をかけた。

「何のたよりもないですよ、おかしな信ちゃんですよ」

駒子は、ようやく心配になってきた。その夜、久我山を訪ねた。

「大分金まわりがよくなってたようですから、思いきって羽根をのばしているんじゃありませんか」

と、老母がいった。あとのことを考えずに、浪費してよいような金を駒子はわたしていなかった。駒子は、画室にはいった。「春林」も「早春の湖」も消えていた。風早みどりの予言が適中した。

五日もつづけて、伊賀は行方不明であった。毎日久我山に電話をかけてたしかめることが、いやになった。自分ひとりがやきもきしているのが、馬鹿々々しかった。ひとつ屋根の下にいたならば、こんなことはありえないだろう。会っているときだけが自分の良人であり、他の大部分の時間は、駒子にとって他人同然であった。伊賀が旅行に出たのは、たしかであった。妻がそのことを知らないのである。良人の行方を、姑に訊いているなど、不見識な話である。

留守中の久我山をたずねなければならないと思う。それは、妻というもののつとめでもあった。あるいは、日本の妻というもののつとめであるかも知れなかった。五日間に一度だけ、駒子は久我山をたずねた。一時間ぐらいで、かえった。

六日目に電話をかけると、

「伊勢路を歩いてきたよ」

けろりとして、伊賀が答えた。

「葉書でもいただいたら、心配しなかったのに……」

「心配？　何の心配だ」

電話の声が大げさにおどろいた。駒子は、気を悪くした。

「週刊誌に伊勢路のことが出てたので、急にいってみたくなったのだ。松をさがして歩いたよ。とうとうみつけた。月夜の松だ。海岸の松だ」

自分のこと以外には、関心がないのだ。これまで伊賀はそんなふうにすごして来ていたのだろう。母親は、その調子に慣らされていた。駒子は、良人としての責任がないのだと思う。つまり伊賀には、妻帯の責任がないのである。良人としての報告の義務を失っていた。

その夜、駒子は久我山に来た。伊賀家の夕食は終っていた。

「ごはんは？」

すませていなかったが、

「すんだわ」

と、駒子は嘘をついた。持ってきた洋菓子で、一時しのぎは出来ると思った。伊賀は母親に、四日市の名産の「ながもち」を買ってきた。親子で食べてしまって、ひと切れしか残っていなかった。母親も伊賀も、「ながもち」のことはわすれていた。

「不意に行方不明になるのは、困るわ。よけいな心配をするんですもの」

「よけいな？」

「どんな事故がおこるか、知れないでしょう」

「目的なしに、ふらりと出ていくのは、これまでのぼくの癖だ。スケジュールをたてて旅行はしたくないよ」

「あなたはそれでも、よいでしょうけど、あとのものが困ります」

「お袋は、ちっとも心配してないよ」

「どうしてそんなお金があったの？」

伊賀が、にやりと笑った。

「運が向いて来たんだ」

「おみやを買って来て下さったでしょうね」

微笑を添えた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com